

茶山 健太 (Sayama Kenta)

2020～2022 年度奨学生

オックスフォード大学 地理・環境学部 博士課程

1. 環境問題と自らの生活を振り返って

オックスフォードで生活をしていて私がすごく驚いたことの一つ、それは周りにいるベジタリアンやヴィーガンの人の数である。菜食主義は近年、日本でも話題となりつつあり実際にレストランなどでもベジタリアンメニューを用意する場所が段々と増えているようだが、オックスフォードに来てみて、その数に非常に驚かされた。大学の食堂でも常にベジタリアン・ヴィーガンの人のために、肉・魚を使わない料理が用意されているし、友達を家に呼ぶようになったら、呼ぶ友達の食事制限を確認するのが当たり前だ。イギリスに来る前にも、少数ながらベジタリアン・ヴィーガンの方々に会うことはあったのだが、オックスフォードにおけるその割合は他の場所の比喩にならないように感じる。特に私は、地理環境学部という環境問題に対して非常に関心の高い人が多い学部にも所属していることもあり周りの半数ぐらいの人たちが、肉・魚を摂らない生活をしているのではないだろうか。サステナビリティという単語が一般化している中、日本では経験したことのない水準で環境問題を“自分ごと”として捉えている周りとは過ごしている留学生生活を振り返り、私自身が思う環境問題に対する意識について少し話させていただければと思う。

環境問題に関して学生が一個人としての生活において変えられることは大きく二つあると考える。それは、食生活と交通手段だ。まず、食生活に関してだが、野菜中心で動物性タンパ

ク質、特に牛肉などの赤身肉を控えた生活をするのが二酸化炭素排出削減に繋がると言われている。私は 4 年ほど前にブラジルでインターンシップをしていた際、アマゾン熱帯雨林の伐採の原因の大半が牛の放牧、またはそのための飼料(大豆・とうもろこし)の農場の開発であることを知り、牛肉をほとんど食べなくなった。これ以前私は自分一人が何かを変えたところで世界は何も変わらないだろうと思っていたのだが、自らの目で地球の肺と呼ばれる森林が伐採されている様子を目の当たりにして、少しでも何かしなければと思い、この決断を下したのを覚えている。

ただ、普段の生活におけるもう一つの大きな二酸化炭素の排出源、交通手段を考えると私の生活、そして研究はあまり環境に良いとは言えない。イギリスにおいて中東に関する研究をしている日本人の私は普段の生活で車を運転することはないものの、帰省するためや研究を行うために飛行機を多く使わざるを得ない。ただ、有名な環境活動家であるグレタ・トゥーンベリさんが移動手段として使うことを頑なに拒否していることから分かる通り、飛行機は環境への負担がかなり大きい。ただ、皮肉なことに私の食生活に関する決断も環境に悪い国際移動をしていなかったらきっと起きていないだろうし、自分の大きな強みである国際的な経験は、多くの飛行機移動の結果だ。現在行っている研究でも、その一部として中東地域の大地の遺産を環境教育などにどうやって活用するかを考察しているのだが、そ

の研究を行うために飛行機移動は欠かせない。自分が未来の地球環境にとって良いことだと思いついて行っている研究が本末転倒にならないように私ができること、それは研究を通じて環境に与えたダメージ以上に有用な結果を出すことに限るだろう。

環境問題に対応するために個人レベルで生活習慣を変えるということは、気候変動に関する暗いニュースが多い現代において必要なことであると私は思う。ただ、私自身の生活を振り返ってみても、環境にとって最善なことをしようと考えるだけでは経験できることも限られるし、豊かな生活を送ることは難しいだろう。正直、食べることが大好きな自分がヴィーガン生活を送ることも想像できない。ただ、だからと言って何もしないのもおかしいと思う。何をどこまですればいいのか、そしてそれを周りに広げていくためには何ができるのか。これはそう簡単に答えがでる問いではない。ただ、自らの経験を生かして問題提議をし、周りの人を巻き込んで考えていくことはできると思う。考えることが仕事である博士課程の研究者として、本稿のような機会を通じて、積極的に発信していきたい。

2. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

私は大学 3 年生頃に遺産保全の分野に本格的に関わるようになってから、世界遺産を管轄し、世界規模で遺産保全に取り組んでいるユネスコにおいて、世界遺産のうち特に文化遺産と自然遺産両方の性質を持つ複合遺産の保全に携わることを目標に将来設計をしてきました。博士課程 2 年の中盤を迎える今もこの目標は大きく変わっていませんが、博士

の研究、課外活動を通じて自分の興味関心をより深く理解し、より具体的な将来計画を思い描くことができるようになったのではないかと考えています。

私は現在、中東地域における地球の自然環境の成り立ちを知るために重要な地質遺産、また大地の遺産の保全に関する研究という、パッと聞くと理系分野に偏ったような研究を行っています。ただ、実際の研究内容としては大地の遺産をより人々に理解してもらい、保全すべきものだという認知を高められるかを考えるもので、特に地質学と考古学の関わりについての考察を軸にしています。実際私は高校時代までは自他共に認める文系人間でした。ただ、文系、理系という枠組みが日本にはっきりと区分化されていない海外において、学際的な研究を行っていく中で自然遺産、または文化遺産を用いて、高校生時代の自分のような人たちに、環境問題や、自然と文化の関わりなどについて興味を持ってもらえるのかということに焦点を当てることが多くなってきました。

そんな中、昨年 10 月に、文部科学省と日本ユネスコ国内委員会事務局によって公募された次世代ユネスコ国内委員会に選出され、若年世代(30 歳以下)の代表として日本におけるユネスコ活動の活性化と若者の役割について議論する場をいただきました。同世代の様々なバックグラウンドを持つ委員との話し合いは、非常に刺激的であると同時に今までは海外、特に開発途上国中心に研究や学習をおこなってきた自分にとって、自分の生まれた国の課題に目を向ける、非常にいい機会となりました。

現在はこの委員会の中で、特にユネスコの登録事業(世界遺産、ユネスコ世界ジオパーク、エコパーク等)の利用、活性化について考える小グループで、日本ユネスコ国内委員会やパリにあるユネスコ本部に対する提言の執筆に取り組んでいます。公的機関への提言提出だからこそその難しさを感じることもありますが、非常にやりがいを感じていると共に、自分の将来の目標への大きな一歩になっていると感じています。三月には、世界の若者と意見交換を行うイベントを開催することとなり、より見識を深められることを期待しています。

遺産保全の研究という、非常にニッチな分野に携わっている私ですが、坂口財団からの非常に温かい援助を受けながら留学生活を送る中で、自分のやっていることの意義をより深く理解し、将来へのイメージをより具体的に膨らませるとともに、そのイメージに近づく実績を少しずつ蓄えることができています。

以上